

8. Aiとミイラ

坂上 和弘 独立行政法人国立科学博物館人類史研究グループ

博物館の展示で最も人気があるのは「恐竜」です。大昔に生きた巨大な生物の化石は、老若男女を問わず、多くの人を惹きつけてやみません。恐竜ほどではありませんが、人気のある展示が「ミイラ」です。ミイラには見る人の「驚き」と「興味」を呼び起こす、特別な魅力があります(図1)。また、展示として、意外にもミイラは非常に魅力的な研究資料でもあります。ある文化圏でのミイラは、その文化における死生観や宗教観に重要な手がかりを与えてくれます。また、当時の人の遺体そのものですので、DNAはもちろん、食べ物、寄生虫、感染症、生活環境、文化風習など、さまざまな情報の宝庫です¹⁾。さらに、未来に開発される新しい方法によって、さらなる情報を引き出すことができる可能性もあります。

ところが、展示・研究する側の人間としては、「ミイラ」はいろいろな問題を引き起こす可能性がある、扱いが難しい

資料です。まず、ほかの資料とは比較にならないほど、来館者に対する気遣いが必要となります。ミイラを実見することで、多くの来館者がショックを受けて嫌悪感を示されますし、「ご遺体をさらし者になっている」といったたぐいの非難を受ける場合もあります。展示する側としては、ミイラを心の準備なく目にするのがないよう、「この先にミイラがあります」といった表記を掲示する必要がありますし、「珍しい」とか「興味深い」以上に、「このミイラを展示する必要性」を説明しなければなりません。また、ミイラの保管・管理がきわめて難しいことも、問題として挙げられます。そもそも、ミイラは人体ですので、温度・湿度の管理はもちろん、ネズミ、昆虫、そしてカビなどからの保護も必要です。また、ミイラが発するのにおいに対する処置も必要とします。展示する際には、照明による熱や展示場のホコリ、紛れ込んでしまう虫などにも

注意する必要があります。結果として、ミイラを保管・展示するには大変な手間と費用がかかってしまいます。

例えば、日本には世界的に見ても非常に特殊なミイラ「即身仏」が存在します。鎌倉時代から明治時代にかけて、東北・北陸において宗教的な目的で作られていました。これは、ミイラになる本人が生きている間に「十穀断ち」や「絶食」などで体内環境を調整し、最終的には地下の空間(入定塚)の中でミイラ化する、という過酷なものです。即身仏は寺院に納められ、信仰の対象となりました。1960年代に科学的な調査が行われましたが、即身仏のほとんどにネズミや虫の咬み跡が見られた、と報告されています²⁾。現在も、即身仏は寺院で大切に保管されていますが、姿勢の変化やカビの発生など、傷みが目立つようになってきています(図2)。

そして、最大の問題点は、研究対象



図1 世界最古のミイラ文化である、チンチョーロ文化のミイラ



図2 即身仏の現状
密閉型のガラスケースに収納しているにもかかわらず、頸周辺にカビが生えてしまっている。